

教皇フランシスコ 逝去 言葉と行いでいつくしみを説く



バチカンでは4月21日、ローマ時間の午前10時前に、教皇フランシスコが午前7時35分、バチカンで逝去したと発表した。写真は4月20日の「復活の主日」、聖ペトロ大聖堂中央バルコニーに車いすに乗って現れ、復活祭の祝福を送る教皇フランシスコ（CNS）

国際

- 教皇フランシスコ 逝去 1・2面
- 世界の牧者 言葉と行いでいつくしみを説く 2面
- 自ら出向き 人々に寄り添った 教皇 入院以後の日々 3面
- ミャンマー地震で死者増 枢機卿が即時停戦訴える 4面

国内

- 大阪・関西万博 イタリア・バチカン館開館 4面
- 教皇庁宣教事業前会長とカテキスタの集い 5面
- 日本の国で ベトナム人信徒と歩む ニャー神父に聞く 6面
- 自由な大地へ ウィシュマさんのビデオ映像を巡り
名古屋入管「全面不開示」決定 7面
- 2025年 司祭叙階70・60・50・25周年 7面
- ミャンマーの叫び 同国出身司祭からのメッセージ 8面
- カリタスジャパン ミャンマー地震救援募金 8面

- 主日の福音解説 9・10面
- 書籍紹介・美術展 11面
- きょうをささげる(祈禱の使徒) 5月 11面
- 訃報・告知板・番組 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」創刊号をお届け致します。
(「カトリックジャパンニュース」には下記QRコードからアクセス可)

カトリックジャパンニュース



国際

教皇フランシスコ、世界の牧者 言葉と行いでいつくしみを説く

【バチカン4月21日CNS】4月21日に88歳で逝去した教皇フランシスコは、数億人ものカトリック信者に新たな活力をもたらしたと同時に、一部の信者の間には懸念も生じさせた。教皇職のイメージを、顔を突き合わせる出会いや貧困と宣教と対話についての強い信念に基づいた司牧奉仕につくり変えたからだだった。

ローマ・カトリック教会のカメルレンゴ（使徒座空位期間の管理責任者）を務めるケビン・ファレル枢機卿は、教皇フランシスコがローマ時間の午前7時35分に逝去したと発表した。

「教皇の全生涯は主とその教会への奉仕にささげられました」とファレル枢機卿は、教皇フランシスコが宿舎にしていた「聖マルタの家」から動画で配信された発表で述べた。

教皇の、病者を抱き締め、何度も受刑者を訪れる行いは、数多くの人の心に感動をもたらした。ただ、抑制の効かない資本主義の行き過ぎや人間が及ぼす気候変動への影響に警鐘を鳴らし、同性愛の人々を裁かずに寄り添う姿勢を強調したことは、論議も呼んでいた。

教皇フランシスコは2月14日、気管支炎と呼吸困難のためにローマ市内のジェメッリ総合病院に入院した後、3月23日にバチカンに戻り、回復を目指して療養していた。

神のいつくしみは、教皇の教説の中で一貫したテーマであり、教会の司牧奉仕が体現するべきだとする自身のビジョンから、教皇は2015年12月8日から16年11月20日までを「いつくしみの特別聖年」と定めた。

教皇職で一貫して説く 福音の喜びと環境保護

2013年3月13日に選出された教皇フランシスコは、歴史上初めての南半球出身の教皇となり、ほぼ1300年ぶりに選出された非欧州人で、聖ペトロの後継者となる初めてのイエズス会士となった。

教皇職の最初の3年間で、教皇は三つの主要な文書を発表する。使徒的勧告『福音の喜び』は、自身の教皇職の活動計画のビジョンを詳細に示して、自身の教会についてのビジョンも明らかにし、特に世俗社会から持ち上がる課題への取り組

みと対応を説いた。環境問題についての回勅『ラウダート・シ』の後、使徒的勧告『愛のよろこび』は、14年と15年の家庭についてのシノドス（世界代表司教会議）での議論についての教皇の考察を記している。

聖性と平和と連帯や 教会の機構改革にも

聖性は18年に発表した使徒的勧告『喜びに喜べ』の主題で、教皇は聖人になることは退屈でも不可能でもなく、聖性は日頃の小さな行動と愛にあふれる優しさの行いを通して育まれると強調した。

教皇フランシスコは前任者たちの足跡をたどり、たゆまずに平和を訴え、武力紛争の終結を求めて、対話を支持し、和解を促した。

教皇は22年2月のロシアによるウクライナ侵攻を「狂気の沙汰」と断じて、世界の司教たちに向けて、自身と共に「マリアの汚れなき心」にウクライナとロシアを奉獻するよう呼びかけた。

23年10月にイスラム組織ハマスの戦闘員によるイスラエル南部への奇襲攻撃で多数の犠牲者が出て、200人以上が人質とされ、イスラエルが報復として

パレスチナ・ガザに侵攻したことを受けて、教皇フランシスコは繰り返し人質の解放を求め、人道支援を届けるための停戦と交渉による和平への実質的な取り組みを訴えた。

平和と連帯と地球の尊重を求めてきた教皇は、人々は互いを兄弟姉妹として認め合う必要があると強調し、回勅『兄弟の皆さん』を発表した。教皇はこの回勅への署名を20年10月4日、アッシジの聖フランシスコの記念日にその墓前で行った。

教皇フランシスコは教皇職の初めの9年間の多くを、二つの意欲的なプロジェクトに費やす。その一つ目は、教会の福音宣教への努力を再び活性化させることで、教会内部の事案への懸念よりも、外に向かうことを一貫して促していた。そして二つ目は、バチカンの中央集権的な機構を改革し、世界の司教に方針を指示するよりも支援する役割を強調した。

教皇の素朴な生活様式は、使徒宮殿に住まないことに決めたり、高級車には乗らず小型車でローマ市内を巡ったりする姿勢に表れ、バチカン関係者や世界の聖職者たちに質素な生き方の模範を示した。教皇は頻繁に福音が求め、証しする貧しさと質素さの証しについて訓戒することで、自身のメッセージを強く打ち出していた。

教皇は何度も旅行は苦手だとしながら、47回も国外への使徒的訪問を行い、南



2013年9月11日、バチカンでの一般謁見で、集まった人々にあいさつする教皇フランシスコ（CNS）

国際

北アメリカ大陸や欧州、アフリカ、アジアに福音の喜びのメッセージを届けた。

常に質素で貧しく生き
出向いて行く姿勢貫く

ホルヘ・マリオ・ベルゴリオは1936年12月17日、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで生まれた。58年3月にイエズス会の修練院に入る。69年12月に司祭に叙階され、73年に終生請願を宣立した。

92年5月にブエノスアイレス教区補佐司教に任命され、5年後に協働大司教に任命された後、98年に同教区大司教となる。2001年に聖ヨハネ・パウロ2世教皇により枢機卿に叙任された。

250万人の信者を擁するブエノスアイレス教区大司教時代には、人々に寄り添うことに心を砕く。ベルゴリオ枢機卿はバスに乗り、貧しくされている人を訪ねて、質素なアパートに住んで自炊していた。

枢機卿団の中でも尊敬を集めていたベルゴリオ枢機卿は、2005年のベネディクト16世が選出されたコンクラーベ（教皇選挙）では、4度の投票全てで2位の票を集めたと報じられていた。

その8年後の13年3月13日、コンクラーベの2日目、5度目の投票で教皇に選出される。教皇は「貧しさと平和の人で、被造物を愛して守った」アッシジの聖フランシスコへの敬意から、フラン

シスコと名乗ったと振り返っていた。

「出向いて行く」ことを、教皇フランシスコは一貫して、バチカン高官の枢機卿から一般信徒まで、全てのカトリック信者に求めていた。教皇は一度ならず強調していた。福音ではイエスが人々の心の扉をたたき、ご自分を迎え入れるよう求めていたと説かれているが、今日のイエスは小教区の教会の扉をたたき、出て行って人々の間にあらうとするよう促しておられる。

教皇フランシスコにとって、無防備な人を助けることは、特に受刑者や戦争被害者、さらには信仰の故に迫害を受けているキリスト者や他の少数派の宗教信者に特別な配慮を示すことをも意味していた。

自ら出向き、人々に寄り添った
教皇フランシスコ 入院以後の日々

2月14日 1週間以上続いた気管支炎と呼吸に支障を来す症状のため、ローマのジェメッリ総合病院に入院。気道の感染症と診断。

2月16日 病室から人々の祈りに感謝。

2月18日 教皇は両肺に肺炎発症とバチカンが発表。

2月24日 教皇、聖体を拝領。夜には

(パレスチナ・)ガザの司祭に電話をかけ、寄り添いを表す。

2月28日 単発的な気管支けいれんによる呼吸危機により嘔吐。容体は悪化し、医療チームは教皇が「持ちこたえられない危険がある」と気付く。しかし「誰も諦めませんでした」（医療チームを率いた医師）

3月3日 2度に及ぶ急性呼吸不全を起こしたが意識ははっきりしているとバチカンが発表。

3月10日 「危機は脱した」と発表。

3月16日 回復が徐々に進み、入院後、初めての写真が公開される。

3月23日 退院。

4月6日 「病者と医療従事者の祝祭」に予告なく現れてあいさつする。

4月10日 私服で聖ペトロ大聖堂に現れ、祈る。人々と会い、赤ちゃんを祝福

する。

4月13日 枝の主日（受難の主日）。ミサの最後に短いあいさつ。説教は読み上げられ、「キリストの十字架を担うことはむなしいことではありません」と述べる。

4月17日 聖木曜日、ローマのレジナ・チェリ刑務所を訪れる。教皇フランシスコはアルゼンチンの大司教だった頃から毎年、聖木曜日に刑務所などを訪れてミサを司式し、宗教や男女を問わず人々の足を洗ってきた。「今年はそれをできませんが、皆さんに寄り添うことはできるし、そうしたいのです」と受刑者に語りかけた。

4月20日 復活の主日。正午過ぎに聖ペトロ大聖堂の中央バルコニーに車いすに乗って現れ、復活祭の祝福を送った。代読されたメッセージで「復活祭はいのちの祭りです」と強調し、「弱い人、疎外された人、移住者」に向けられた「さげすみ」を非難。世界の紛争地での永続的な平和を祈った。

4月21日 朝7時35分、逝去。



4月10日、私服でバチカンの聖ペトロ大聖堂内に現れて、赤ちゃんを祝福する教皇フランシスコ (OSV)



教皇フランシスコは4月17日の聖木曜日、訪問したローマのレジナ・チェリ刑務所内で、自身と面会できなかった受刑者たちにキスを送った (CNS)

(※本欄の情報は週刊カトリック新聞、カトリックジャパンニュースから抜粋)

国際

ミャンマー地震で死者増
枢機卿が即時停戦訴える

【マンダレー（ミャンマー南西部）3月31日OSV】ミャンマー南西部マンダレー・サガイン地方域を震源として3月28日に発生した大地震による死者が増え続ける中、国民は緊急に人道支援と医療援助を必要としている。

ミャンマー司教協議会会長のチャールズ・マウン・ボ枢機卿（ヤンゴン教区）は、既に内戦で疲弊している上に大地震に見舞われた国内での即時停戦を求めている。

ロイター通信によると、3月31日時点で死者が2000人を超え、負傷者も3900人に上っているとされているが、余震も続いた大地震による行方不明者は数百人いて、死者はさらに増えると思われる。

国連人道問題調整事務所（^オ ^チ ^ャ ^エ ^{ックス} ^ハ）のミャンマー事務所は3月30日、X（旧ツイッター）への投稿で、今回の大災害で「厳しい人道危機に直面して既に深く傷ついている国民にさらなる圧力」がかかっていると指摘した。

「人々は緊急に避難所や医療ケア、水や衛生支援を必要としている」とOCHAミャンマー事務所は訴えている。

同国2位の都市マンダレー付近を震源としたマグニチュード7・7の地震で、道

路や建造物、宗教施設などが破壊された。

地震後も空爆継続 国軍に非難集まる

即時停戦を求める祈りと訴えは力を増している。

バチカンで健康の回復に努めている教皇フランシスコも、ミャンマーのための祈りを呼びかける。3月30日に公表された「お告げの祈り」のメッセージで、教皇は「大地震でもひどく苦しむミャンマー」など、世界の紛争地域での平和のために祈った。

ボ枢機卿は声明を発表し、教皇の祈りに感謝しつつ、「パゴダ（仏塔）やモスク（イスラム礼拝所）など、礼拝施設で亡くなった方々」への弔意を表した。

同枢機卿は、カトリック教会による「食料や医薬品、避難所など、いのちに関わる必要に応えるため、支援態勢を強化する」とした上で、国内で続く内戦の即時停戦が、「地震と長引く紛争の双方によって苦しんでいる人々への」人道支援を行うために「絶対に必要」だと訴えている。

「この人道危機は、緊急に敵対をやめることを求めています。私たちは緊急に、全紛争当事者による即時かつ全面的な停戦を訴えます。国内外からの支援が安全に妨害を受けずに届けられるためです」

とボ枢機卿は声明で述べている。

2021年にクーデターを起こして文民政権を倒した国軍は、国内の多数の反政府勢力との戦闘で民間人に対する暴力を働き、非難を受けてきた。

各反政府勢力は一方的に地震による被



4月1日、ミャンマー南西部マンダレーで、仮設テントに避難した人々。大地震は3月28日の真昼に発生した（OSV）

災地域での2週間の停戦を訴えているが、国軍は地震後も反政府勢力の支配地域への空爆をやめていないと報じられている。

国連ミャンマー人権状況特別報告者のトム・アンドリュース氏は、英国BBC放送によるインタビューで、国軍の空爆継続は「全く言語道断で容認できない」と憤り、「人々を救助しようとしている時に爆弾を落とし」続ける国軍の行為は「信じがたいと言うしかない」と訴える。

「とにかく国軍に対して、やめるように、あらゆる軍事作戦をやめることを求めます」

国内

大阪・関西万博 イタリア・バチカン館 開館
フィジケッラ大司教があいさつ



左から駐日教皇庁大使フランシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教、フィジケッラ大司教、前田万葉枢機卿。カラバッジョ作『キリストの埋葬』の前で

「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、4月13日、大阪・関西万博が開幕した。イタリアパビリオンの中に置かれたバチカン館（パビリオン）の開館式には、教皇庁福音宣教省・世界宣教部門の副長官サルバトーレ・フィジケッラ大司教が参加し、次のように述べた。

「バチカンパビリオンは、傑作『キリストの埋葬』の展示を通じて希望の道具になる美を世界に紹介できることを誇りに思います。このカラバッジョの絵画は今回、特別な機会として、バチカン美術館が所蔵する作品中、唯一海外に持ち込まれたものであり、聖座は福音宣教のまたとない手段になる芸術の偉大さを世界と分かち合うことに力を注いでいます」

（記事全文は、カトリックジャパンニュースで。右QRコードからアクセス可）



国内

教皇庁宣教事業前会長と
カテキスタの集い
福音宣教の課題と挑戦語り合う

今年2月まで教皇庁宣教事業の会長を務めていたエミリオ・ナッパ大司教（バチカン市国行政庁次官）が、3月23日から26日まで4日間、日本を訪れた。25日、都内で開かれたナッパ大司教とカテキスタ（要理教師）との集いに約40人が参加し、次世代への信仰の継承など、日本の教会の課題と挑戦について語り合った。ナッパ大司教による講演を通して、世界中の他の地域でも行われている福音宣教とのつながりも再確認した。

世界的ネットワークで宣教地を支援する

全世界の福音宣教は、バチカン省庁の一つである福音宣教省の下で進められている。世界には約3000の教区があるが、そのうち日本の15教区を含め、「宣教地」とされるアジア、アフリカ、オセアニアの1200教区については、福音宣教以外の複数の分野も福音宣教省の管轄下にある。その分野とは、司教の任命や、司祭の規律の問題と養成、奉獻生活の会と使徒的生活の会に関する問題などだ。

教皇庁宣教事業は1922年、福音宣教省の一部署として設立された。「ミッシオ」とも呼ばれる同事業は、宣教を推進するための世界的ネットワークでもある。全世界のカトリック教会を通して祈りと献金を促進し、宣教地の教区に必要な経済的支援を行っている。

東京教区の「教区カテキスタ」と
日本カテキスタ会の
「教区カテキスタ」が集う

この日、カテキスタとの集いに参加したのは、①東京教区の「教区カテキスタ」②同教区の教皇庁宣教事業（ミッシオ東京）のスタッフ③日本カテキスタ会（NCK）の「教区カテキスタ」④アフリカ・マラウイで学校給食支援を行うNPO法人「せいぼジャパン」関係者のほか、宣教師や修道者だった。

集いは「聖霊の続唱」などの祈りで始まり、東京教区の教区カテキスタ養成を担当している小西広志神父（フランシスコ会）の司会進行で進められた。

小西神父は、これまで共に集うことがなかったカテキスタと福音宣教を担う人々

が一堂に会した「貴重な集い」だと語った。また、2021年から24年にかけて行われたシノドス（世界代表司教会議）第16回通常総会の「ともに歩む教会のためー交わり、参加、そして宣教」というテーマに沿って、東京教区の教区カテキスタについて紹介した。

現在、教区で養成を受けた60人が複数人ずつのグループに分かれて司教によって小教区へ派遣され、入門講座を担当している。教区カテキスタは、小教区共同体と受洗希望者の「交わりをつくる」などの働きをしていると小西神父は語り、教区カテキスタは「サービス（奉仕活動）ではなく召命」だと強調した。外国出身者とその子どもたちへのカテケージス（要理教育）が必要になっている現状や、教区カテキスタの養成に、シノドスで用いられた「霊における会話」という分かち合いの手法を取り入れていることにも触れた。

生活を通じた
カテケージスの可能性

ナッパ大司教は講演で、教皇庁宣教事業の前会長として「特別な願いがある」と語り、あらゆる場面で「教会の社会教説(社会問題に関する教会の考え)を教えるのを忘れないでほしい」と呼びかけた。教会の社会教説が重要なのは、それがキリストによる全人類の救済を目指しながら、いかに福音的に社会生活を送るかを示す教えであるためだとナッパ大司教は説明した。禁教時代に信仰を守り抜いた日本の殉教者の存在にも触れながら日本の教会でカテケージスを通して福音を伝えていくカテキスタらを励ました。

参加者の一人が、子どもの姿が見えない小教区でどのように信仰を継承したらいいかと質問すると、ナッパ大司教は「（次世代に信仰を伝える場合は）教会だけではないと思いますよ」と、励ますように答えた。その一例として、教会から帰宅した後、子どもたちに教会で得た喜びを表現することの大切さを挙げ、生活を通じたカテケージスの可能性について話した。

集いの後半は、茶話会形式で行われた。同じ「教区カテキスタ」という名称であっても、奉仕の仕方が異なる東京教区の教区カテキスタと、NCKの教区カテキスタが、それぞれ直面している課題



ナッパ大司教（前列左から3人目）と参加者たち

や展望について語り合う場面もあった。ナッパ大司教は参加者との歓談後、全員に祝福を送り、集いを終えた。

喜びを表すことの大切さを感じた

この集いに招かれた日本カテキスタ会（NCK）は、各教区で活動する教区カテキスタの集まりで、会員は現在72人。これまで教皇庁宣教事業からの経済的援助を基に、年に2回公開講座を催してきたが、昨年初めて援助が打ち切れ、講座を1回に減らした。

NCK会長の武井利泰さん（群馬・藤岡教会）は、ナッパ大司教に援助の継続を求めようと集いに参加したが、講話でアフリカなど経済的に困難な地域での福音宣教の状況を知り、思いとどまると、こう話した。

「公開講座には会員以外の方も全国から参加しているので、会員個人ができる範囲で経済的に支えながらも続けたい。今日は、これまでもわずかながらしてきた海外での宣教活動の支援にも力を入れたいと、思いを新たにしました」

横浜教区でカテキスタとして活動している中村祥子さん（神奈川・雪ノ下教会）は、「ナッパ大司教様がずっとおっしゃっていたのは、キリスト者としてどう生きるかということ、喜びを表すことの大切さだったと思います」と振り返った。

日本の教皇庁宣教事業（J-MISSIO）代表の門間直輝神父（東京教区）は、集いの第一の収穫として、カテキスタ同士の交流の場があったことを挙げた。

ナッパ大司教は日本滞在中、長崎市の日本二十六聖人殉教者記念碑や、信徒発見の地（大浦天主堂）を訪れ、東京では宣教師や信徒らと宣教について対話した。アンドレア・レンボ東京教区補佐司教と行った対談は、J-MISSIOのウェブサイト(<https://j-missio.org/>)で公開中。（右QRコードからアクセス可）



国内

日本の国で
ベトナム人信徒と歩む
グエン・タン・ニャー神父に聞く

現在日本には63万人以上（2024年末時点）のベトナム人が暮らしている。東京・千代田区こうじの麴町教会で土日に



グエン・タン・ニャー神父

行われるベトナム語ミサに出席するベトナム人信徒は1300人余り。その多くはカトリック信者が多く暮らす、ベトナムの中部地方出身の技能実習生だ。

ベトナム人司牧の現場について、麴町教会助任司祭を務めるベトナム出身のグエン・タン・ニャー神父（42／イエズス会）に話を聞いた。

ベトナム人信徒の増加

技能実習制度は、対象国の人々に日本で技術を習得させ、その技術を母国の発展に生かしてもらうという「国際貢献」をうたったものだ。しかし実情は、日本の労働力不足を補うため、技能実習生に技術習得とは無縁の業務を長時間、低賃金で強要することが多く、賃金未払い、労務災害、劣悪な労働環境など、さまざまな人権侵害が生じている。

最も多くの技能実習生を日本に送り出している国、ベトナム。全国各地に暮らすベトナム人の若者たちにとって、教会は居場所であり、悩み事を相談できる場所、また仲間と励まし合う場所でもある。

ベトナム人司牧の現場では、信仰に関すること以外に、労働、貧困、ビザなどについて多岐にわたる問題に直面するため、ベトナム人司祭・修道者の役割は重要になっている。

ニャー神父は「2012年頃から、来日するベトナム人技能実習生が増えて、信徒も一気に増えたのです」と振り返った。

ニャー神父は代々カトリック信者の家庭に生まれ、大学卒業後すぐにイエズス会に入会。もともと日本人信徒の司牧のために09年に日本に派遣され、17年に日本で司祭に叙階された。

来日当時は、ベトナム人信徒は今よりも少なかった。「（ベトナム出身の）ヒエン・フー神父様（東京教区）が月に1度、麴町教会でベトナム語のミサを行っ

ていましたが、参加者は100人程度でした」。

ニャー神父によれば、日本では長い間、ヒエン神父が一人でベトナム人信徒の司牧をしてきたのだという。ヒエン神父は1980年代、ベトナム戦争後の社会的混乱から逃れるために小型船で海外に脱出して日本にたどり着いた「ボートピープル」の人々の司牧のために、バチカンを通じて派遣された。

「日本の司教様方もヒエン神父様も、まさかベトナム人信徒がこれほど一気に日本に来ると思っていなかったようです」

情報共有の場をつくる

最初はヒエン神父が一人で担っていたベトナム人司牧だが、徐々に日本にベトナム人司祭が派遣されるようになった。ベトナム人司祭はニャー神父のように、日本人信徒の司牧のために派遣されるのだが、日本各地に住むベトナム人信徒の司牧にも関わるようになった。ニャー神父は次第に、司祭同士の情報共有が必要だと感じるようになる。

そこで22年に、日本カトリック難民移者移動者委員会（J-CaRM）ジェイ カームの元で、ベトナム人信徒の司牧に関わる全教区の司祭・修道者に呼びかけ、対面で年に1度の情報交換会を始めた。青年大会や、カトリック入門、結婚講座などについてどのように協力できるか、統一した内容での実施が可能かを話し合っている。今年も3月に旧福岡カトリック神学院を会場に実施した。ニャー神父は「教区ごとの方針があるので、すり合わせるのがなかなか難しい」とも感じていると話した。

うれしい疲れ

大学や専門学校に通う留学生に比べ、技能実習生は労働時間が長く、日本語を習得する機会や時間が少ないため、言語が身に付きにくい。さらに労働契約違反などに遭うことで生活に困窮する場合もあり、神父を頼らざるを得ないのだ。ニャー神父はかつて、多いときには毎日200～300人の生活相談を受けていた。一時体調を崩し、3カ月の休養を取ったこともある。

「今は協力し合える司祭が増えました。（ベトナム人信徒たちが自分で学べるように）日本社会で日常生活を送るための知識を解説する動画を30本以上作って、私のフェイスブックにアップしました。（病院に行きたい信徒がいれば）日本語が得意なベトナム人青年に通訳を頼むこともあります」。ニャー神父は、生

活に困窮しているベトナム人技能実習生が専門家とつながるよう、J-CaRMが実施する相談会「生活相談ホットライン」にも協力している。

ニャー神父は麴町教会のほか、埼玉や茨城、東北地方でもベトナム人を司牧。入門講座と結婚講座はオンラインで行い、300人もの受講生がいるという。「今年1月3日は22組の合同結婚式をしました」

もちろん、このほかに日本人のための信仰講座やミサも担当している。日々の仕事や活動が盛りだくさんで「疲れているけれど、うれしい疲れです」とニャー神父は話した。

忍耐を持って一緒に歩む

ニャー神父はベトナム人の特徴を「相手に親しみを持って接するので、教会なら家族のような関係になります。集まることも好きです。年長者を大切にしますし、初対面でも自分の父親と同じ年齢なら、自分のお父さんのように接します」と話す。

「特に技能実習生は、（留学生と違い学校などで）日本人の友達をつくる機会がなくて、みんな寂しがっている」ともニャー神父は感じている。日本全国には、約70のベトナム人の青年グループがあるが、「（ベトナム人信徒が）日本の教会に少しでも入っていけるよう、（青年グループの）リーダーを通してコミュニケーションできるようになるといいと考えています」。

日本人の信徒たちには「忍耐を持ってベトナム人信徒たちと関わってほしい」とニャー神父は話す。

「18歳くらいで高校を卒業して日本に来る技能実習生は、まだ『子ども』です。子どもなのに仕事をしなければいけないし、遊びたいし、仲間と一緒にワイワイしたい気持ちを持っています」

若いからといって羽目を外していいということではないが、ニャー神父は「一緒に歩むことを面倒だと思わずに、忍耐を持って関わってほしい」と話していた。



ベトナム人信徒の若い家族の集まり

国内

自由な大地へ

ウィシュマさんのビデオ映像を巡り
名古屋入管「全面不開示」決定

2021年3月、名古屋出入国在留管理局（以下・名古屋入管）の収容施設で死亡したスリランカ人女性、ウィシュマ・サンダマリさん（33）の生前の様子が映った入管個室でのビデオ映像を巡り、名古屋入管は、遺族の開示請求を退け、今年3月26日付で「一切開示しない（全面不開示）」との決定通知を遺族に送付した。

これに対し、ウィシュマさんの遺族と遺族代理人弁護団は4月3日、参議院議員会館で記者会見を開き、名古屋入管の「全面不開示」の決定についての取り消しを求めて5月にも東京地方裁判所に提訴すると発表。

ウィシュマさんは名古屋入管の収容施設で栄養失調と脱水症により体調を崩していたにもかかわらず、点滴も外部病院での入院も認められず、収容からわずか半年余りで死亡した。遺族は名古屋入管がさまざまな「義務違反」によってウィシュマさんに必要な医療を提供しなかったとして、国家賠償請求訴訟を3年前に起こした。

遺族は当初から名古屋入管で何が起き

たのか、その事実が分かる有力な証拠としてウィシュマさんの個室にあった監視カメラに収録されている約295時間のビデオ映像の開示を求めてきた。しかし、名古屋入管はその2%未満に過ぎないわずか5時間分のビデオ映像しか公開していない。

ウィシュマさんの遺族代理人弁護団の指宿昭一^{いぶすき}弁護士によれば、名古屋入管側はビデオ映像の「全面不開示」の理由として、①ビデオに映るウィシュマさん以外の名古屋入管職員等の個人情報を守れないこと、②名古屋入管内の様子が映っているため「公共安全と秩序の維持に支障を及ぼすおそれがある」ことなどを挙げているという。

しかし、既に裁判資料として開示されている5時間分のビデオ映像は名古屋入管職員等の顔にマスク（ぼかし）処理が施されており、残りの290時間の映像も同様に個人情報を守る処理を行えばいいだけである、と弁護団は指摘。

さらに5時間分の映像が開示された後も、名古屋入管の安全と秩序は守られているということにも併せて言及した。

同弁護団の駒井知会^{ちえ}弁護士はこう話す。

「ウィシュマさん死亡事件について法務省がまとめた最終報告書（21年8月）と5時間分の映像をすり合わせても、表現が違っていたり、報告書に書かれていないことがあったりします。事実を明らかにするためには、295時間全部の映像の開示が不可欠なのです」

記者会見に出席したウィシュマさんの妹、ワヨミさんとポールニマさんは今回の「全面不開示」の決定に深い憤りとともに驚きと悲しみの入り混じった感情を抑えつつ、ビデオ映像は（加害者側である）名古屋入管の占有物ではないことを強調した。そして、「遺族には事実を知る権利がある」と強く訴えていた。



ウィシュマさん名古屋入管死亡事件を巡る国賠訴訟第16回口頭弁論後の記者会見（2月5日）。左からウィシュマさんの妹、ワヨミさんとポールニマさん。5月にはウィシュマさんの姿を映した約295時間のビデオ映像の全面開示を求めるもう一つの裁判を起こす

2025年 司祭叙階70・60・50・25周年

おめでとうございます！

カトリック中央協議会によると、今年叙階70周年（プラチナ祝）を迎えた司祭は全国で5人、60周年（ダイヤモンド祝）は13人、50周年（金祝）を迎えた枢機卿・司教・司祭は17人、25周年（銀祝）を迎えた司祭は18人。以下、該当者の氏名を掲載する。年齢は3月31日時点。

◇プラチナ祝(70年)

【横浜教区】佐々木治夫（95）【福岡教区】畠山七郎^{しちろう}（96）【エスコラピオス修道会】ラカラ・ヘスス（92）【クラレチアン宣教会】フラデラ・オディン・アントニオ（96）【聖コロンバン会】ケンズ・バリー（93）

◇ダイヤモンド祝(60年)

【札幌教区】千徳康雄^{ちとく}（87）【仙台教区】高橋昌^{まさし}（88）【横浜教区】岡村巖^{いわお}（90）【京都教区】花井拓夫（92）【イエズス・マ

リアの聖心会^{みこころ}】ドネガン・ウイリアム（84）【イエズス会】ドイル・ドナル（93）、塚田健統^{たけのり}（93）【淳心会】コレーン・アンドレ（83）【ドミニコ会】サンズ・ラファエル（84）【パリ外国宣教会】シェガレ・オリビエ（85）、ペラール・ピエール（85）【フランシスコ会】続橋和弘^{つづきばし}（88）

◇金祝(50年)

【札幌教区】イ・ウォングュ（李源圭）（78）＝韓国・ソウル教区【京都教区】瀧野正三郎^{しょうざぶろう}（77）【大阪高松教区】前田万葉（76）＝枢機卿【福岡教区】アベイヤ・ヨゼフ・マリア（75）＝司教【長崎教区】松下光男（78）、小瀬良明（77）【イエズス会】ミヘルチッチ・ヤネス（82）、裏辻洋二（82）、岩島忠彦（81）、山根敏身（80）【コンベンツアル聖フランシスコ修道会】久保芳一（77）【神言修道会】ファウゾーネ・アルフォンソ（78）、

カルマーノ・ミカエル（76）【聖ザベリオ宣教会】マリン・フランシスコ（81）、チェルティ・フェデレ（75）【フランシスコ会】中村道生（83）、小高毅^{たけし}（82）

◇銀祝(25年)

【東京教区】荒川博行（56）【横浜教区】保久要^{やすひさかなめ}（58）、ハン・ジョンス（韓最守）（56）＝韓国・ウィジョンブ教区、イ・チョンユン（李廷胤）（51）＝同教区【大阪高松教区】松村繁彦（56）【長崎教区】竹内英次（52）【イエズス会】ゴンサルベス・タッド（60）【カルメル修道会】松田浩一^{ひろかず}（64）【クラレチアン宣教会】梅崎隆一^{たかいち}（55）【神言修道会】オマン・マルティヌス（53）【聖アスグスチノ修道会】柴田弘之（60）【聖ザベリオ宣教会】ビビアーノ・ロッコ（52）【聖ビンセンシオの宣教会】カルデナス・ロヘリオ（55）【ドミニコ会】原田雅樹（57）【フィリピン宣教会】ブガス・リカルド（57）【フランシスコ会】山谷篤（64）、小西広志（63）【メリノール宣教会】ダム・ロー（64）

国内

ミャンマーの叫び
大地と人々の苦しみ

同国出身司祭からのメッセージ

ミャンマーで3月28日に起きた大地震。現地の人々、また教会はどのような状況にあるのか。日本国内で働くミャンマー出身のビンセント神父に、メッセージを寄せてもらった。

ミャンマーで大地震が発生したという知らせを受けた時、私の心に浮かんだのは、日本のことわざ「泣き面に蜂」でした。まさに今のミャンマーの状況を表す言葉ですね。長い間、ミャンマーの人々は、次々と押し寄せる苦しみにも耐え続けてきました。

3月28日、ミャンマー中部を襲ったマグニチュード7.7の大地震は、同国の歴史にさらなる苦難の章を加えることとなりました。マンダレー地方やサガイン地方といった国の中心地に深刻な被害を与え、さらに東部のあまり知られていない地域にまで影響が広がりました。こうした地域では、被害の全容さえ把握されておらず、今も救援の手が届いていない場所が数多くあります。ミャンマーはこのような規模の地震には慣れていないため、人々の間に強い恐れと不安が広がっています。

今回の地震が起こる前から、ミャンマーはすでに数多くの困難を抱えていました。2021年の軍事クーデター以来、国内は混乱に陥り、経済は崩壊寸前。新型コロナウイルスの影響もいまだ大きく、大規模な洪水や内戦が人々の生活を脅かし続けています。人災に苦しめられてきた国に、今度は自然災害が追い打ちをかけているかのようです。

現在、多くの市民が地震ではなく内戦の影響によって、家を失い、森や山中での避難生活を余儀なくされています。食料や医療、教育を受ける環境もなく、日々の暮らしは極めて厳しいものです。

それにもかかわらず、ミャンマーの人々の日常は国際社会の関心から外れがちであり、今回の地震による被害が注目される中で、内戦による「静かな苦しみ」はますます見えにくくなっています。

私の故郷も、今ではとても住めるような状況ではありません。街は人影もまばらで、かつての生活の面影はほとんど残っていません。こうした現実が、ミャンマー全土で起こっているのです。

しかし、このような幾多の危機の中でも、希望の光は消えていません。若者の多くは国外に逃れるか、国内にとどまっても危険のため活動ができない状況にありますが、それでも人々は互いに助け合い、自分たちの力で困難な状況にある人の支援を行っています。

特にカトリック教会は、この試練の中で重要な役割を果たしています。被害が大きいマンダレー教区をはじめとする教区では、損傷を受けながらも多くの教会が今も立ち続け、人々の避難所となっています。各地の教会は限られた資源の中でも支援活動に取り組んでおり、「教会は暗闇の中でも鼓動を続ける心臓である」と言えるような存在となっています。

日本にいる私たちは、地震発生のお知らせを受けてすぐに、(長年、ミャンマーの「姉妹教会」として協力している)東京教区に報告し、

「ミャンマーのための祈りの集い」を開催しました。ミャンマーの友人たちとプロテスタントの兄弟姉妹も共に祈り、募金活動などを通して支援の輪が広がっています。遠く離れた地であっても、同じ人間として心をつなぐことができることは、大きな希望です。

自然災害と人災が重なるこの状況の中で、私の心からの願いはただ一つです—ミャンマーに平和と癒やし、そして希望がもたらされること。

日本の皆さん、そして世界中のカトリック共同体の皆さんに願っています。どうか、ミャンマーの人々のために祈り、行動してください。家を失った方々、家族を失った方々、そして未来への希望を失いつつある方々のために。そして今も森の中で避難生活を送り、声を上げることができずにいる方々のために。さらに、こうした苦しみの中でも静かに、勇敢に奉仕を続けているすべての方々のために、祈ってください。

私たちは皆、同じ舟に乗っているのです。人間としての連帯の心が、祈りを生み出し、その祈りが私たちを行動へと導いてくれることを、私は信じています。

この小さな希望の火が、世界中の人々の心に届きますように。そして、ミャンマーの人々に少しでも多くの光と支えがもたらされますように祈っております。



カリタスジャパン
ミャンマー地震救援募金

カリタスジャパン(担当司教＝成井大介司教／新潟教区)がミャンマー地震のための救援募金を受け付けている。募金受付口座は下記の通り。

郵便振替：00170-5-95979

加入者名：宗教法人カトリック中央協議会 カリタスジャパン

＊記入欄に「ミャンマー地震」と明記。

「ゆうちょダイレクト」インターネットサービス、他行から振り込む場合は、カリタスジャパンのサイトの「募金の方法」を参照。

なお「ゆうちょダイレクト」や他行から振り込む場合は、依頼人の氏名の後に「6262」(ミャンマー地震救援募金の意向番号)を記入のこと。

募金は今回の地震救援活動に用いられるが、万一活動終了時に残金が発生した場合、ミャンマー国内の他の支援活動のために使われる場合がある。

(電話03-5632-4439)



カリタスジャパン募金サイト

主日の福音解説

5月4日（復活節第3主日）

ヨハネ 21・1－19 または 21・1－14

普段着のまま

長崎県五島列島が私の故郷である。子ども時代の夏休みは海が遊び場だった。筏や栈橋からはよく飛び込んだし、家の玄関から駆け出し、そのままの勢いで目の前の海へ飛び込んだこともある。

ただ、「裸同然だったので、上着をまとして飛び込んだ」(ヨハネ 21・7 参照) 記憶だけはどこをどうさらっても出てこない。これは今日の福音に描写されているペトロの行った行動だが、不自然とも思える一連の動きをどう理解すればいいのだろうか。

まず思いつくのは、着衣をイエスへの敬意と見なす解釈である。主イエスにお目にかかるのに、さすがに「裸同然」でいいはずがない。そう考えたペトロはとっさの判断で上着を身に着け湖へ飛び込む。この解釈は思い付きの域を超えて、「着衣問題」をあらかじめ解決してくれそうな印象を受ける。

ところが、ここには二つの疑問点も残る。一つ目は、そもそもペトロは「裸同然」であったはずがないという異議である。こう主張する聖書学者たちは存外多い。

理由の第1として、彼らは気象条件を挙げる。春のガリラヤ湖は日没後に気温が下がり、夜通し「裸同然」になって働けるものではない、と。「裸の」を意味するギリシャ語の形容詞ギュムノスはいわゆる「裸の」状態を意味することもあるが、文脈によっては「軽装」や「貧しい身なり」を意味することもある。恐らくこの時のペトロは「裸同然だった」というよりも、働きやすい何らかの服をまっていたのではないか。

また、聖書学者たちが「着衣」を問題視する二つ目の理由は、そのことによって生じる「泳ぎにくさ」である。これについて



は「泳ぎにくさ」を引き受けてでも主への敬意を優先するはずだ、というペトロの性格を力説することで十分な反論が成り立つと思われる。

ところが、まさにこうした一種の違和感、つまりわざわざ泳ぎにくい格好になって飛び込むだろうか、というある種の引っ掛かりに関して、レイモンド・E・ブラウンは「上

着をまとして(ディアゾーンニューミ)」という動詞に注目しながら持論を展開するのである。

この動詞には衣類を身に着けるという意味もあるが、自由に動けるよう身に着けている衣服をたくし上げて縛ることを意味する場合もあると言うのである。もし後者の意味合いに重きを置くとすれば、ペトロは既に着ていた服をたくし上げ、泳ぎやすい格好になって湖に飛び込んだとも考えられる。

いずれにしても大事なことは、水をくぐって復活した主に出会うという洗礼のシンボルがここに用いられていることであろう。その時に必要なのは着飾ってみ前に出るのではなく、仕事着や普段着のまま、つまり、ありのままの私として主に近づくことではないかと思う。

くまがわゆきのり
(熊川幸徳神父／サン・スルピス司祭会)

5月11日（復活節第4主日）

ヨハネ 10・27－30

世界召命祈願の日

羊飼いと羊

私たちは洗礼を受ける瞬間から「キリスト者」や「神の民」または「神の子ども」、あるいは「神の羊の群れ」などと呼ばれます。それは私たちが洗礼を受けて身分が変わることを意味します。要するに、洗礼によって私たちは神に属する者となる、神と直接的な関係がある者となるということの意味なのです。そういう意味で、ヨハネは私たちを当時一般に飼われていた動物である「羊」に例えます。



今日、イエス様はこう言われます。「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」。もちろん、羊が自分の飼い主の声を聞き分けるのは当たり前だと思われるかもしれませんが、この言葉には重要な意味が三つ隠されています。

まず第1に、羊飼いと羊の関係です。羊飼いは自分の羊の群れを危険から守り、そのために安全な道を探して導きます。そして自分の羊の群れが飢えることのないように食べさせ、また飲ませます。羊は自分の羊飼いの声を覚え、それに従います。そうするのは自分の命を保つためです。すなわち、羊飼いと羊の関係は命の関係、つまり、羊飼いは羊を生かし、羊は羊飼いによって生かされるということです。神と私たちとの関係が羊飼いと羊の関係に例えられているのです。

第2に、「声を聞き分ける」ということです。声を聞き分けるためにはその声を聞き慣れていなければなりません。その声を毎日聞いてきたという前提があるのです。確かに、羊の群れは朝から晩まで羊飼いと一緒に行動します。最初は羊飼いの声に従わず別の行動をするかもしれませんが、毎日羊飼いの声を聞き、羊飼いの導きに従うなら生きることができ、十分に草を食べることができると気付いてからは羊飼いの声に敏感に反応することになります。それは、毎日羊飼いの声を聞き、羊飼いと一緒に行動した結果なのです。私たちが神の羊の群れなら、このようにしなければならないということの意味なのです。

第3には、誰が羊飼いに属している羊なのかということです。その羊の群れの中には最初から一緒だった羊もいれば、後で加わった羊もいるでしょう。あるいは途中でいなくなる羊もいるはずです。今日の福音の前の箇所、イエス様はこう言われます。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける」(ヨハネ 10・16)。私たちが洗礼によって羊の群れに加わったとすれば、まだ洗礼を受けていない者がどうしてイエス様の声を聞き分けることがあり得るのでしょうか。実は人間は創造された時から神の霊を受けていますし、神の声を聞く場所として「良心」を持っています。従って、良心的に人間として守るべきことを守り、皆のための善を追い求める人は、まだ洗礼を受けていないとしてもイエス様の声を聞き分けるということです。

羊は羊飼いから離れたら絶対に生きることができません。毎日一緒に行動し、その声に従っていかなければ死んでしまうのです。だから、私たちも命を得るために、私たちにとっての羊飼いであるイエス様に従うよう、今日イエス様自身がお教えになるのです。その導きに応えることこそが私たちの召命であり、信仰なのです。(ダニエル・キム・ドンウク〈金桐旭〉神父／韓国殉教福者聖職修道会)

主日の福音解説

5月18日（復活節第5主日）
ヨハネ 13・31－33a、34－35

イエス様といつも一緒

「神様がわたしたちといつも共にいて…わたしたちの涙をこ
とごとく拭い取ってくださる」
（第2朗読・黙示録21章参照）

「共にいてくださる。一緒にいてくださる」。これが今日のみ言葉
のテーマです。

ですから、一緒にいない。一緒にいることができない。一緒に
いてもずっと孤独を感じている。これらはわたしたちにとって、最
も苦しいことであり、涙です。

ユダはイエス様を祭司長たちに引き渡すため、イエス様や仲間
の使徒たちの元から出て行ってしまいました。ユダと一緒にはいな
くなってしまう。これは使徒たちにとって、大きな苦しみでした。
さらに、使徒たちはその後のイエス様の死に苦しみ、涙します。もっ
と苦しかったことは、自分たちがイエス様をおいて逃げてしまった
こと。その途方もない恥ずかしさと悔しさでした。逃げてしまった
弱い自分自身の姿を見ることができなかったのです。

これは今のわたしたちと同じです。一緒に過ごしていたあの人
が、自分の期待通りにしてくれなかった。信じていたのに裏切られ
た。わたしたちはこれらのことに傷つき、悲しみ、怒ります。

また、あの人に優しくすることができなかった。最後まで一緒
にすることができなかった。こういった無力感にわたしたちは苦し
み続けます。

今日の第1朗読での使徒たちは伝えています（使徒言行録14
章参照）。「悩み、苦しみをとおって、神の国に入らなければなら
ない」。これは苦しみが神の国に入る条件だと言っているわけではあ
りません。



「今のあなたの苦しみ、
悲しみ、寂しさを持った
まま、イエス様のことを
人々に伝えていきましょ
う」と呼びかけているの
です。「神様は苦しさに
涙するわたしたちと一緒
にいてくださっている方
です。その神様と一緒に
いることに気付くこと。
それが神の国です」と。

ユダが出て行ってしまった後、イエス様は弟子たちに言われま
した。「みんなありがとう。わたしが愛したように、あなた方も互
いに愛し合いなさい」。イエス様も寂しくて涙されていたはずで
す。神様はわたしたちの涙を拭ってくださるとき、一緒に涙してくださ
るのではないのでしょうか。

イエス様はわたしたちに声をかけ続けます。「自分がいなくなっ
た後、あなた方がことが心配ですが、神様がそばに一緒にいてくだ
さいます。だから思い通りにならなくても怒らないで、憎まないで。
苦しいとき、悲しいとき、寂しいとき、泣いていいんですよ」

さらにイエス様は語ります。「わたしが一緒にいて楽しかった時
のように。いつまでも互いに仲良くしてください」と。

（寺浜亮司神父／福岡教区）

5月25日（復活節第6主日）
ヨハネ 14・23－29
世界広報の日

聖霊と平和を与える約束

十字架に死んでいく前にイエスは親しかった弟子たちと食事を
共にし、その中で長いあいさつをしました。それはただのあいさつ
ではなく、別れのあいさつでした。その一部分が本日のヨハネ福音
書の内容です。

弟子たちをこの世に残していくことになるイエスには、言っ
ておきたいことがたくさんあったことでしょう。また、弟子たちはイ
エスがなくなってしまうことに恐れと不安を感じていたに違いあ
りません。

そのような弟子たちを励ますために、しかも具体的に励ますた
めにイエスは二つのものを与えると約束します。「聖霊」と「平和」
です。

ヨハネ福音書は聖霊という言葉をあまり使いません。「弁護者」
「真理の霊」と言い換
えています。



弁護者というのは
「そばに呼ばれた者」
という意味だそうで
す。困難や試練の中
にある人が助けを呼
んで誰かに自分のそ
ばに来てもらうこと
を表す言葉です。「
いつもそばにいて
慰め、励まし、助
けてくれる」、それ

が弁護者である聖霊の働きです。

イエスは十字架に死んでいくけれども、聖霊という形で弟子た
ちのところに必ず戻って来ることを約束しました。やがて聖霊は実
際に弟子たちに遣わされ、その聖霊の促しと励ましによって弟子た
ちはイエスの後を引き継いでキリストの福音を宣べ伝える者になっ
ていきます。

もう一つイエスが与えると約束したのは平和です。これはわた
したちが一般的に考える平和とは少し違います。

平和というと、一般的には、戦争や自然災害などが無い状態を
考えるでしょう。また、病気やけががなく健康であることも平和と
呼ぶでしょう。

イエスが与える平和は神から与えられる本当の平安、心の安ら
ぎのことです。現実には戦争や自然災害などがあります。病気やけ
が、困難や試練もあります。そのような厳しい状況にあっても神に
信頼することによって与えられる心の平安、安らぎこそがイエスが
与えると約束した平和です。

弁護者である聖霊とイエスからの平和が与えられますようにと、
わたしたちはミサをささげるたびに聖霊を求める祈りと平和を願う
祈りを唱え、平和のあいさつを交わしています。イエスが与えると
約束してくださっている聖霊と平和に励まされ、支えられながら、
わたしたちは信仰の道を歩み続けます。

（立花昌和神父／東京教区 カットは全て高崎紀子）

文 化

人間塾 仲野好重塾長
カトリック新聞のコラム 新刊本に

一般財団法人 人間塾の仲野好重塾長は、週刊のカトリック新聞で2013年12月から10余年にわたって教育コラム「若者へのメッセージ 不安社会の中で逆流を生き抜く」を担当した。全136回のコラムは、自分が受けた恩を他の人に返す「恩送り」によって「支え合いの連鎖」を広げていこうと呼びかけるものや、自分の才能を生かして「君だからこそできる生き方」で人を幸せにしていこうと励ましを与えるものなど、若者たちにとって人生の視点を変えるヒントにあふれている。4



月25日には、同コラムの130回分を掲載した『君は捨てたものじゃない!』(キリスト新聞社刊／1600円＋税)が発売されることになった。

仲野塾長が代表理事を務める人間塾は創立から14年にわたってスカラシップ(給付型奨学金)制度で大学生を応援し、さらに「世のため、人のため」に貢献できる人間教育によって大学生の「人間力」を高めることに尽力している。これまで人間塾を修了した若者は100人を超えるが、仲野塾長は2020年の新型コロナウイルスの流行以降、若者たちに大きな変化があったと感じている。

まずコロナ禍でオンライン授業が中心になったことで、ますます人と人との関係が希薄になってしまった。さらに自分で深く考えることもなく、インターネットで得た情報を切り貼りして「自分の考え」に見せかける「仮面をかぶった若者」が増えているのだという。

仲野塾長はこう説明する。
「常に『君は偉いね。できる子だね』などと評価されることを望む若者が目立ちます。大学のゼミに行けば、仲間外れに

されないように周囲の考え方に合わせていく。部活では先輩のやり方を守っていく。いつも「ゼミ用の顔、や「部活用の顔、など、その場その場で「仮面」を付け変えて相手に迎合し、評価を得ようとします。その「仮面」は全部バラバラで、自分を貫く統一の考え方がないので、内面に分裂が起きてくる。そのため中身がない。自信がない。結局、自分が何をやりたいたかが分からなくなってしまうのです」

自分の弱さや醜さ、失敗こそが、実は自分を成長させる「宝」なのだとして仲野塾長は考える。「隠しておきたい本当の自分」を表に出してこそ、初めて自分の足りない部分や学ぶべきところも分かり、成長することができるからだ。

「若者に関わる方々には、忍耐をもって時間をかけて、若者たちを励まし、『ありのままの君を出して大丈夫なんだよ』と声をかけ、彼らの本音を引き出して、自分にしか歩めない道を探すお手伝いをし続けてほしいと願っています」(仲野塾長)

今回の仲野塾長の著書には、若者や、若者に関わる人々への応援メッセージがふんだんに詰まっている。

ヒルマ・アフ・クリント展
6月15日まで 東京国立近代美術館

ヒルマ・アフ・クリント(1862～1944年／スウェーデン)は、「霊的存在」から啓示を受けて制作を行った画家だ。近年、世界的に再評価され、「抽象画の先駆者」として注目を集めている。

小さく書き込まれた「Ave Maria」

東京国立近代美術館(東京・千代田区)で開催中の「ヒルマ・アフ・クリント展」では、代表的作品群「神殿のための絵画」を中心に、日本初公開の140作品と関連資料が展示されている。アジア初となるアフ・クリントの回顧展だ。

きょうをささげる(祈禱の使徒) 5月

【教皇の意向：労働条件】

一人ひとりが仕事において充実感を覚え、家族の尊厳が保たれ、人間性豊かな社会となりますように。

【日本の教会の意向：子ども】

子どもたちが、健全な心と健康に恵まれ、神の恵みの中で成長していくことができますように。

教皇フランシスコが「労働は、人間が成長し、発展し、自己実現を遂げるための道」と述べているように、労働は単なる生計の手段に置き換えられない尊いもので、

アフ・クリントは、プロテスタント・ルター派の家庭に生まれた。王立芸術アカデミーを優秀な成績で卒業後、職業画家となる。一方、神秘主義に傾倒し、秘教的な思想を土台に制作を続けた。

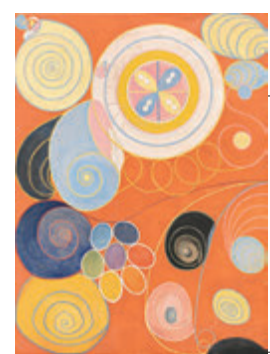
19世紀後半から20世紀初頭の欧州は、X線の発見や放射線の研究など、科学分野で画期的な発明が相次いだ。上流階級や知識人らの間で神秘思想も広まり、科学と「霊的世界」を矛盾なく同時に扱う風潮もあった。

アフ・クリントは、幼年期から青年期、成人期、そして老年期という人生の四つの段階について「楽園のように美しい10枚の絵画」を制作するよう「啓示」を受け、10点組の絵画(10の最大物)を完成させる。いずれも縦約3.2メートル、幅約2.4メートルの大画面だ。

その中で唯一、《10の最大物、グループIV、No. 3、青年期》(写真)には、「Ave Maria」の文字が見える。画面上方の白い円の中心部が4分割され、その一つ一つに、ごく小さく書き込まれている。この作品には、アフ・クリントのキリスト者としての信仰が表れているという見方もできるのかもしれない。

★ 読者プレゼント ★

本展(東京)のチケットを5組10名様にプレゼント致します。ご希望の方は、はがきに、名前、郵便番号、住所を明記の上、〒135-8585東京都江東区潮見2の10の10 カトリックジャパンダイジェスト「ヒルマ・アフ・クリント展」係まで。5月9日(金)当日消印有効。賞品の発送を



©ヒルマ・アフ・クリント《10の最大物、グループIV、No. 3、青年期》1907年 ヒルマ・アフ・クリント財団 By courtesy of The Hilma af Klint Foundation

もって発表に代えさせていただきます。

として、両親をはじめとする養育者の愛情に満ちた関わりは欠かせません。しかし日本では少子家族となっても親の共働きなどによって、子どもの養育に十分な時間が割かれず、孤独を感じる子どもも増えています。貧困に置かれている母子家庭も少なくありません。子どもたちに十分なサポートが与えられ、子ども自身が無条件に愛されていることを実感し、家族をはじめとする人々との愛情に満ちた交わりを通して、心身を健全に発達させ、神に結ばれた人間性を成長させていけるように祈りましょう。

＊

神の愛はどの子どもにも惜しみなく注がれています。子どもの人格的な成長に

計 報

前村八重修道女（殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会） 3月4日、北海道石狩市内の同会修道院

で新型コロナウイルス感染症ならびに老衰のため逝去。105歳。1920年樺太生まれ。48年同会入会。51年初誓願。56年終生誓願。初誓願宣立後、新田（樺戸郡月形町）、函館、北見番場町、旭川、札幌、美唄（びばい）、八雲（以上北海道）と東京の同会修道院内で、与えられた使命を忠実に果たした。最も長く働いた函館マリア院には4回赴任し、合計19年間奉仕。東京と美唄マリア院では共同体の責任者も務めた。2010年に花川マリア院に移り、晩年を過ごしていた。目立つことなく謙遜で、自分のためには何も求めず、静かに共同体で生活した。

ジーン・ファロン修道女（メリノール女子修道会） 3月8日、米国・ニューヨークの同会本部修道院で逝去。94歳。

1930年米国生まれ。47年同会入会。50年初誓願。51年来日。53年終生誓願。京都教区（西院くさいいん）、大津、高野、四日市、津の各小教区）で宣教活動に従事。平和教育に力を注ぎ、日本キリスト教協議会（NCCJ）、日本カトリック正義と平和協議会、特に平和教育とフィリピン問題委員会、修道女連盟の一員としてアジアを深く理解するための活動に力を注いだ。広島や長崎にはたびたび足を運び、平和と原発問題に取り組んだ。2001年米国に帰国。国連にも足を運んだ。06年にはキリスト者平和チーム（CPT）のメンバーとして、パレスチナのヘブロンで数回にわたって平和の使者として現地の人々と生活した。22年には、ワシントンで開催されたパックス・クリスティ（キリストの平和団体）の50周年記念祭で、平和の大使20人の一人に選出された。平和を愛し、正義を生き抜いた。詩人でもあり、日本の美しい自然をこよなく愛し、俳句や墨絵を通して神への感謝を表現していた。3月25日に本部修道院で故人のミサがささげられた。献体された遺体は、2年後に本部修道院の墓地に埋葬される。



山崎順子修道女（殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会） 3月12日、北海道月形町内の高齢者施設で老衰のため逝去。100歳。1924年北海道生まれ。56年同会入会。59年初誓願。64年終生誓願。初誓願宣立後、旭川藤女子中学・高等学校、新田（月形町）の新墾（にいはり）藤女子中学・高等学校、藤女子中学・高等学校で家庭科の教師として忠実に働き、約33年間女子教育のために全力を尽くした。うち7年間

は校長を務めた。定年退職後は、札幌と山目マリア院で修道院内の仕事をした。その後、旭川藤女子中学・高等学校の寄宿舎で7年間舎監長として働き、札幌マリア院に移ってからは院内で奉仕。2019年、月形藤の園に入居して晩年を過ごした（以上北海道）。自身も札幌藤高等女学校（藤女子高等学校の前身）、藤女子短期大学の卒業生であり、藤学園で受けた教育を大切にし、それを生徒に徹底的に伝えることを使命として、家庭科の授業に一生懸命取り組んだ。生徒や卒業生、職員らのために熱心に祈り、多くの卒業生と接し、文通をしていた。卒業生の受洗の知らせに大変喜び、その喜びを会員に分ち合っていた。

スロイテル・ジュリアン神父（サレジオ修道会） 3月14日、東京都内の同会修道院で、老衰のため逝去。98歳。1926年ベルギー生まれ。47年初誓願。56年来日。57年終生誓願。59年司祭叙階。60～74年同会杉並支部・育英高専（現サレジオ高専）で奉職（東京）。74～76年別府末広支部（大分）。76～81年目黒支部。81年から杉並支部で司牧（以上東京）。ビンチェンツォ・チマッティ神父の指導により、長く「病者の布教会」に関わり、病者のために働いた。73年から育英海外ボランティアを発足し、学生たちと共に東ティモールでの活動を行った。真っすぐに紳士的であり、信仰深く生き、接する人々にいつも神の愛を届けていた。晩年、体の自由が利かなくなる中でも静かに祈りをささげ、68年に及ぶ宣教師としての奉獻生活を全うした。



で。無料。☎sekiguchi.sanda.kouza@gmail.com 三田

■東 京

▶祈りのコンサート 5月10日（土）午後2時～3時40分、聖パウロ修道会若葉修道院聖堂。聖歌のレクチャー「聖母マリアと共に～幸せなカタマリア～」と奏楽。講師＝山内堅治神父（聖パウロ修道会）。演奏＝原公一郎（ギター）他。2,500円。☎ave.maris.stella777@gmail.com bi.sei.raku 事務局 北村

▶WYD 十字架・アイコンの国内巡回 【青少年のためのミサ】5月10日（土）午後6時、【召命祈願ミサ】5月11日（日）午後2時、東京カテドラル。電話 043-241-4812 西千葉教会 キム神父

▶詩編を歌う会 5月11日（日）午後2時～4時30分、松原教会。主日の答唱詩編を中心に、典礼聖歌の歌い方を学ぶ。指導＝鈴木茂明（声楽家、合唱指揮者）。2,000円。☎shihe_n_utaukai@outlook.jp 詩編を歌う会事

事務局

▶写教の会（その日の福音を毛筆で写し、心を主に向ける集い） 5月18日（日）午後4時30分～5時50分、麴町教会岐部ホール309号室。主宰＝高橋登志子修道女（聖心会）。持参する物＝筆ペン、文鎮、下敷き30×50㍓（フェルトまたは新聞紙）。5月15日（木）までに要参加申し込み。500円（自由献金）。☎phostere@gmail.com 古賀

■名古屋

▶WYD 十字架・アイコンの国内巡回 5月6日（火・祝）午前10時30分、名古屋カテドラル。セレモニー、十字架礼拝、ミサ。電話 076-264-2536 金沢教会 片岡神父

■大 阪

▶WYD 十字架・アイコンの国内巡回 5月4日（日）午前10時、大阪高松カテドラル。10時のミサ中に十字架行列と礼拝、ミサ後に青年の集い。電話 06-6941-9700 大阪高松教区本部事務局

番 組

ラジオ〈宗教の時間〉「傷ついた癒やし人となるーヘンリ・ナウエンの歩みと言葉ー 第2回」

NHKラジオ第2放送、5月11日（日）午前8時30分～9時。【再放送】NHK-FM、5月12日（月）午前1時～1時30分（日曜深夜）、NHKラジオ第2放送、5月18日（日）午後6時30分～7時。ネットラジオ等で聞き逃し配信あり。ラジオ心のともしび

（朗読・坪井木の実）5月の放送日と執筆者 1日（木）中井俊巳・2日（金）竹内修一（おさむ）・3日（土）許書寧（きよ・しゅにん）（以上テーマ「ほほえみ」）・5日（月）末盛千枝子・6日（火）越前喜六・7日（水）下窄優美（しもさこ・ゆうみ）・8日（木）古橋昌尚・9日（金）林尚志・10日（土）萩原久美子・12日（月）コリ

ーン・ダルトン（以上テーマ「母の心・父の心」）・13日（火）片柳弘史・14日（水）三宮麻由子・15日（木）熊本洋・16日（金）古川利雅・17日（土）岡野絵里子・19日（月）村田佳代子・20日（火）松浦信行・21日（水）こいずみゆり・22日（木）植村高雄・23日（金）森田直樹・24日（土）山本ふみり（以上テーマ「ほほえみ」）・26日（月）今井美沙子・27日（火）山本久美子・28日（水）服部剛（ごう）・29日（木）崔友本枝（ちえー・ともえ）（以上テーマ「母の心・父の心」）・30日（金）堀妙子（「ほほえみ」）・31日（土）竹内修一（「気づき」）。

ホームページ（下記QRコードでアクセス可）では24時間視聴可能。詳細は電話 075-211-9341。



告知板

■全 国

▶オンライン講座「科学と神」 5月10日から毎週土曜午前10時～11時30分、Zoomによるオンライン開催。講師＝三田（さんだ）一郎終身助祭（東京教区

／物理学者）。テキスト＝三田一郎著『科学者はなぜ神を信じるのか コペルニクスからホーキングまで』（講談社ブルーバックス）。詳細と申し込み（5月9日〈金〉まで）は下記Eメールま